

### 3. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その4)】

#### 凍死漂着する南方系の魚たち

冬の北浜には、普段の潜水調査や漁獲物調査でめったに発見されない珍しい動物が打ち上がることがある。常春の白浜でも冬季の海水温はやはり冷たい。2004年2月上旬、13度近くまで急に下がった時があり、熱帯魚のツノダシが、波打ち際でけいれんを起こし、凍死寸前になっているのを目撃した。



2004年1月28日に、1個体のクロハコフグの幼魚が、北浜に打ち上がった。クロハコフグは、通常、沖縄海域に生息する南方系のフグの1種だ。2002年に、本種の凍死した5個体の幼魚の漂着により、36年ぶりに田辺湾での生息が確認されたばかりだった。クロハ

コフグは、特徴的な模様と色合いをしているので、幼魚の時から他のハコフグ類と容易に見分けられる。

### ▲魚の婚姻色となわばり行動

魚の色彩に関する興味深い例として、婚姻色となわばり行動の関係がある。一般に、海産魚類では外見だけでは雌雄は分からないものが多いのだが、淡水魚でよく知られた興味深い例がある。水草などで巣をつくるトゲウオ類は、生まれつき備わった行動から、特定の刺激に反応することが分かっている。魚の形をしていなくても肉薄の物体で、下半分をトゲウオの雄のトレードマークである赤色を塗るだけで、本物の雄はその物体に猛然と襲いかかって、懸命に追い出そうとする。自ら作成した愛の巣を守ろうとする縄張り行動だ。勿論、未熟な個体は、これほど鮮やかに変身しないので繁殖には参加しないし、攻撃もしない。

また、淡水魚のオイカワやカワムツなどで発現する婚姻色も知られる。両種とも繁殖期になると、雄の体表は赤色や青緑色などで染め分けられ、艶やかな色彩に変身する。発色と同時に鰭も長く伸びる。さらに、オイカワは、頭部に追星と呼ばれるいぼ状の突起が多数でき、黒ずむ。その変わりぶりを知らない方々からは、「この魚、なんという熱帯魚ですか」と聞かれるほどの大変身を遂げているのだ。だが、不思議なことに、小さな水槽に数匹の成熟雄と成熟雌1匹を入れてもけんかは起こらない。なにか目に見えないことが起こっているのかもしれないが・・・。

### ▲雌雄で体色が異なるクロハコフグの成魚

クロハコフグの雌雄は、成魚になると模様で判別できると、瀬戸臨海実験所の田名瀬英朋教員が教えて下さった。これまで北浜に打ち上がった小さな体の幼魚は、いずれも黒地に白ゴマ模様をしていた。だが、成魚になると、雄だけは鮮やかなオレンジ色の模様に変身するのだ。クロハコフグの成魚の雌雄の模様の差は、一時的な婚姻色ではないので、繁殖期を過ぎても変わらないはずである。この違いの意味は、あでやかな熱帯魚たちの群れる南西諸島などの海域では、同種のパートナーを間違いなく選択するのに役立っていると思われる。

いかに温暖な黒潮の影響があるとはいえ、紀南地方でクロハコフグの成魚を見ることはまずない。確認されても、すべてが小型の幼魚ばかりで、成長して大きくなった成熟の雄などは一度も確認されたことがない。黒潮に乗って幼魚などが流れ着くことはあるものの、最低でも15度以上の水温でなければ越冬できない。だが、地球温暖化が近年ずっと続いている。黒潮の紀伊半島への接岸などから、今後はこの色鮮やかな雄の発見が期待できるかもしれない。ダイバーらによる生態の撮影による証拠も届けられる日も来るだろう。(つづく)